

高階思考と質的意識

太田 紘史

意識の本性を積極的に明らかにしようとする現代の哲学諸理論のうち、高階思考理論はもつとも頻繁に言及されるところにも、しばしば批判される理論である。本稿は、高階思考理論の最初の提唱者であり、それを徹底的に体系化させてきたデイヴィッド・ローゼンソールによる理論構築と（一節）、この理論に対する代表的な批判と応答を見たのち（二節）、心的質の導入による質的意識の説明に対して新奇な反駁を与える（三節）。

一 高階思考理論の構築

ローゼンソール (Rosenthal, 1986) は議論の準備として、生物意識 (creature consciousness) と 状態意識 (state consciousness) の概念を区別する。我々にとっては目下、覚醒 (arousal/vigilance) という意味での意識が問題になっているのではない。むしろ意識を巡る議論では、ある生物が意識的な生物であるということ（生物意識）ではなく、知覚や思考といった心的状態が意識的であること（状態意識）が問われる。それゆえ、意識を説明するということは、状態意識がいかにして可能であるかを説明することである。以下本稿において、「意識的」という表現は、すべて状態意識を意味する。

状態意識の説明を試みる彼は、外在的な意識観を提案するが、その特異なところは、高階表象、特に高階思考の観点

から意識を理論化しようとする点である。この理論化のために、彼は他動詞性原理を出発点とする。(なお、一・一節から一・三節の議論は主に Rosenthal (1986, 1993, 1997, 2002a, 2004, 2005b) において、一・四節と一・五節の議論は主に Rosenthal (1991, 2005b, 2005c, 2005d, 2005e) で論じられて⁽¹⁾いる。)

一・一 他動詞性原理から高階表象理論へ

ローゼンソールによれば、意識を心に内在的なものと見なすデカルト流の考えでは、心的なものとは心的でないものを区別するのは、それが意識的であるかどうかである。すなわち、意識的であることは心的であることに内在的である。これに対して、もう一つの心の概念では、心的状態は意識的であるがゆえに心的ではない。むしろ心的状態は、それが感覚的であるか、もしくは志向的であるという点において心的である。例えば、思考は非感覚的かつ志向的であり、知覚は感覚的であるとともに志向的であり、一部の感覚は感覚的かつ非志向的かもしれない。いずれにせよ、これら二つの特性のいずれをも有さない状態は心的なものとは見なされない。それゆえ、意識的であることは心的であることにとって外在的である。

デカルト流の考えに沿えば、心的状態が感覚的であるか志向的であるという選言的特性を有するのは、それらの特性が心的状態の本性たる意識に由来するからであると言える。だがこの考えに立つと、意識を心的なもので説明する道が自動的に断たれる。なぜなら、心的なものはその本性において意識的であるので、意識を心的なもので説明することが循環的となるからだ。これに対して、外在的な心の見方に立つと、我々は心的なものによって意識を説明する道が開かれる。なぜならこの見方では、心的なものが本性的に意識的であるわけではないので、心的なもので意識を説明することが循環的ではなくなるからだ。

ローゼンソールは、意識を心的なもので説明するために、この外在的な意識観を、二つの意識概念を導入しつつ次の

ような仕方では表現する。

(TP) ある心的状態が意識的であるのは、それが意識されているときである。(A mental state is conscious if one is conscious of that state.)

状態意識は、常に自動詞的な語法で表現されるので、自動詞的意識 (intransitive consciousness) とも呼ばれる。そして上記の原理は状態意識を、他動詞的な語法で表現される意識概念、すなわち他動詞的意識 (transitive consciousness) の概念 (正確には、状態意識を対象とする他動詞的意識) で分析する。それゆえこれは他動詞性原理 (transitivity principle) と呼ばれる。

自動詞的意識の概念においては、ある状態が端的に意識的であるかどうかと言及される。すなわちこの概念のもとは、意識の状態 (conscious state) と無意識の状態 (unconscious state) が対比される。ここでは、その状態が何らかの対象を伴うかどうか、もしくはどのような対象を伴うのかは問題ではない。これに対して他動詞的意識の概念においては、ある主体ないし状態が何らかの対象を意識しているかどうかと言及される。すなわち、ある主体ないし状態が、ある対象を意識している (conscious of) か意識していない (unconscious of) が対比される。このように他動詞性原理では、状態意識が被説明項であり、他動詞的意識が説明項となる。

他動詞性原理は常識的理解に訴えるときされる。もしも我々が自身の心的状態についてまったく気づいていないなら、素朴な観点からは、それは意識的であるとみなされない。例えば、私がイライラしているとして、しかし私がそれにとまったく気づいていなければ、私は無意識的にイライラしていたと言われるだろう。ただし、これが常識的理解であるとしても、それはもちろん出発点に過ぎず、これを起点にした適切な理論化が必要である。それは、説明項として登場する他動詞的意識を特徴づけることに他ならない。

他動詞的意識は、それが何らかの対象を伴う点で表象的である。それゆえ他動詞性原理は、高階表象 (higher-order

representation) による意識の説明を含蓄する。なぜなら他動詞性原理は、説明対象となっている意識的な心的状態に加えて、それを表象対象とするさらなる心的状態、すなわち高階表象をなす状態（高階状態）を措定するからだ。こうして、他動詞性原理を表象の観点から具体化する理論は高階表象理論 (higher-order representational theory) としての地位を獲得する。その主張は次の通りだ。

(HOR) ある心的状態が意識的であるのは、それが表象されているときである。(A mental state is conscious if one is representing that state.)

ここで注意すべきは、他動詞性原理における状態意識と他動詞的意識を区別することであり、そしてそれに平行して高階表象理論における意識的状态と高階表象を区別することだ。というのも上記の主張は、その説明項と被説明項の両方に意識概念が位置づけられているために、一見循環的であるように思われるからだ。しかしこれは、意識的状态と他動詞的意識をなす状態が同一であるときに限ってそうである。実際この説明においては、そのような同一視は否定されている。ある状態が意識的であるのは、それを対象とする高階表象が随伴するときであるが、その高階状態が意識的である必要はない。こうして、高階表象理論は循環を回避することができる。

高階状態が意識的である必要がないという点は、無限後退の回避を保証する。もしも、意識的状态（低階状態）に伴する高階表象をなす状態（高階状態）も常に意識的なのであれば、次のようにして無限後退が生じたであろう。ある心的状態が意識的であるとき、それを対象とする高階表象が随伴し、仮定によってこの高階状態は意識的であり、それゆえそれを対象とするさらなる高階表象が随伴し、そして同様のことが繰り返される。しかし、他動詞的意識と状態意識を区別し、意識的状态（低階状態）を表象する状態（高階状態）が意識的である必要がないとすれば、繰り返し高階表象が生起する必然性はなくなり、むしろそれは我々の心理学的能力に依存的に限界を示すはずである。

このように、意識的状态を表象する状態が意識的である必要はないという点は、それら二つの状態が別個の状態であ

ることを含意し、これは高階表象理論の具体化に対する制約となる。⁽²⁾

一・二 高階表象理論から高階思考理論へ

我々は、高階表象の具体化について、高階知覚と高階思考という二つの選択肢を有している。なぜならすでに述べた通り、心的状態は志向的性質か感覺的性質のいずれかを有しており、また当の高階表象は表象的である点で志向的であるので、それに加えて感覺的性質を有すればそれは知覚様の表象であり、そうでなければ思考様の表象であるからだ。第一の選択肢を採用すれば、高階知覚理論 (higher-order perception theory) (内部感覺説 (inner sense theory) とも呼ばれる) が手に入る。これを実践する代表的な論者がアームストロング (Armstrong, 1980) やライカン (Lycan, 1986) とされ、歴史的にはロックやカントがそれを支持したとされる。他方、第二の選択肢を採用すれば、高階思考理論 (higher-order thought theory) が手に入ることになる。これがローゼンソールの選ぶ道だ。

第一の選択肢に従って、高階表象を知覚的なものとして特徴づけることが一見もつともらしく思われるならばそれは、しばしば話題になる意識の質的特性 (qualitative character) —— すなわち質的意識 (qualitative consciousness) —— を説明するために、高階表象を知覚的なものとみなすことが動機づけられるからだ。これを主張することは、高階表象に対して、低階の心的状態とは別個の質的特性を措定することに他ならない。だが、低階状態がその質的特性を介して物理的対象を知覚するのに対して、高階状態がその質的特性のゆえに低階状態を知覚するというのは明らかではない。実際、質的特性は各感覚器官の特定様相のもとにあるはずだが、低階状態がなす知覚の感覺様相とは異なるような、高階状態がなす知覚に特有の感覺様相といったものが、一体どのようなものであるかは不明だ。

心的状態は感覺的であるか志向的であるかのいずれか (もしくはその連言) であるので、意識的な心的状態は、意識的な感覺的状态であるか意識的な志向的状态のいずれか (もしくはその連言) である。高階表象理論によれば、意識的

な知覚とは、意識された感覚的かつ志向的な心的状態であり、意識的な思考とは、意識された非感覚的かつ志向的な心的状態である。知覚は特定感覚様相の質的特性を伴った心的状態であるという事実に加えて、意識的知覚は意識された知覚であると考えたと、意識的知覚において呈示される質的特性は、意識された知覚に伴う質的特性、すなわち低階状態の特性であるはずだ。それゆえ、低階状態の質的特性に加えて、高階状態の質的特性を指定する利点はない。

この点は、意識的な思考について考察すれば、よりはっきりとする。意識的な思考には、いかなる感覚様相の質的特性も見出されない。それゆえ、仮に高階表象が知覚的であったとしても、その高階知覚の質的特性は、それが表象する意識の状態には反映されないはずだ。すると、意識の状態に反映されない質的特性を、あえて高階状態に指定する理由がなくなる。

こうしてローゼンソールは、高階表象を知覚様ではなく思考様のものと見なすことを選び、第二の選択肢、すなわち高階思考理論を提唱する。この提案によれば、ある心的状態が意識的であるのは、その心的状態が思考されているときである。こうして、高階表象理論は次のような仕方で高階思考理論へと変容をこうむる。

(HOT 1) ある心的状態が意識的であるのは、それが思考されているときである。(A mental state is conscious if one is thinking that state.)

ローゼンソールによれば、我々は高階思考に対して、二つの制約を設ける必要がある⁽³⁾。

第一に、高階思考は主張的 (assertoric) でなければならぬ⁽⁴⁾。これは、意識的な (例えば) 疑念が可能であることと矛盾しない。意識的な疑念を我々が有するとき、低階状態が疑念という種の思考であり、高階状態は自身が疑っているという主張的な思考である。

第二に、高階思考は非推論的 (noninferential) でなければならぬ。例えば仮に、私が何らかの無意識的な感情を有しており、私は自身の行動を分析することで、その感情を有していると知ったとしよう。このとき、私は自身の感情

を思考しており、当の心的状態に対する高階思考を有しているが、それでもその感情が意識的となるとは限らない。この事例は、ある心的状態がそれに随伴する高階思考によって意識的であるためには、その高階思考に関して制約が必要であることを示す。この状況では、高階思考とそれが思考する心的状態が直接的ではなく、推論を介してそれらが接続されている。それゆえ、ある心的状態が意識的であるためには、それが非推論な仕方でも思考されなければならない。以上の二点を考慮に入れると、高階思考理論は次のような形式になる。

(HOT2) ある心的状態が意識的であるのは、自身がその状態にいたることが非推論的に思考されるときである。
(A mental state is conscious if one is noninferentially thinking that one is in that state.)

さらに高階状態と低階状態が別個の状態である点（一・一節参照）を考慮に入れると、次の形式で高階思考理論が完成することになる。

(HOT3) ある心的状態Sが意識的であるのは、それとは異なる心的状態によって、自身がSにいたことが非推論的に思考されるときである。(A mental state S is conscious if a distinct state is noninferentially thinking that one is in S.)

一・三 非内観的意識と内観的意識

我々の意識的状态は、内観的(introspective)な意識的状态であることよりも、非内観的な意識的状态であることのほうがはるかに多い。実際、我々は、何かを意識的に見たり考えたりするとき、その度に、自身の状態について意識的に考えはしない。すると、意識的状态に対して高階思考を措定するのは、一見非常に奇妙に思われる。高階思考理論はむしろ、内観的な意識的状态を説明する理論なのではないかと疑われるかもしれない。もしもそうであれば、高階思考理論は、意識的状态の理論というよりも、非常に限られた種の意識的状态を理論化するものと結論づけられるであろう。

う。

だがローゼンソールによれば、高階思考理論は本来、非内観的意識を説明するように構築されている。当の疑念は、高階思考理論が非内観的意識と内観的意識を別のものとして説明する点を見れば解消される。注意すべきは、高階思考理論が非内観的な意識の状態に対して措定するものが無意識的な高階思考であるという点だ。

私がおかを非内観的に意識的に思考したり知覚したりするたびに、私はまさか自身の心的状態について考えているようには思われない。しかし高階思考理論はこの点によっては反駁されず、それどころかそのような状況を予測する。というのも、高階思考理論では、ある心的状態が意識的であるのはそれが思考されているときであるが、この高階思考それ自体が意識的である必要はないからだ。低階状態が意識的であるためには、それが高階状態によって思考されていなければならぬが、この高階思考は低階状態に対する他動詞的意識であればよいのであって、それ自体が意識的である必要はない。我々の心的状態が意識的であるとき、それを可能にする高階思考は意識的ではないため、そのような高階思考が随伴しているように思われないのは当然である。むしろ、高階思考が意識的であるのは、我々が、その高階思考（二階思考）に対するさらなる高階思考（三階思考）を有するときだ。一般に内観的意識と呼ばれるものは、高階思考理論では、この三階思考の随伴によって二階思考が意識的であることとして説明される。高階思考理論は、内観的意識を説明する理論と混同されがちだが、それは、本来は意識的状态を説明するために構築された理論である。

内観的意識をどう取り扱うかは、非内観的意識の説明にとっても重要である。それについてどのような立場をとるか、意識の性質を論じるうえで含意をもつため、次に見るように、高階思考理論はこの点でも他の理論と競合することになる。

ハーマン (Harman, 1990) によれば、内観によっては、経験そのものの性質は何も見出されない。私がいかに内観しようとも、そこに見出されるのは経験の対象の性質だけである。この点において、経験はいわば透明 (transparent) であるとされる。この透明性テーゼは、経験を表象と見なす (そして経験を質的特性を表象内容とみなす) 表象理論 (representational theory) (もしくは高階表象理論と区別して、一階表象理論 (first-order representational theory)) を強く動機づける。

高階表象理論の立場をとるローゼンソールは、透明性テーゼを拒否する。確かに、自身の視野を内観したとしても、何らかの新奇な質が知覚されることはない。ここで、何も新奇な質が知覚されることがないとみなすならば、経験そのものの質的な性質 (心的質 (mental quality)) は存在せず、経験を表象する物理的対象の性質 (物理的質 (physical quality)) だけが存在することになるだろう。だが彼によれば、この考えは、内観を知覚的なものとみなす暗黙の想定に基づいている。内観がある種の知覚であると前提するならば、内観において新奇な質が意識的に知覚されないことは、経験そのものの質がないことを確立するだろう。しかし、高階思考理論では、内観的意識において追加的に機能するのは、知覚ではなく、ある種の思考 (三階思考) である。内観的意識において我々が行っていることは、知覚されている質を心的質として思考することであるので、たとえ新奇な質が内観において意識的に知覚されなくとも、心的質が存在しないことにはならず、透明性は帰結しないという。

赤いリンゴの質をどのようなものとして意識的に見るかは、その知覚的な意識の状態が非内観的なものであるか内観的なものであるかによる。非内観的な意識の状態においては、リンゴの赤さは物理的質として意識的に知覚されているのに対し、内観的な意識の状態においては、リンゴの赤さは心的質として意識的に思考されている (Rosenthal, 2005b, pp. 117-21; Rosenthal, 2005d, pp. 222-3.)。すなわち、非内観時には、それ自体は無意識的な高階状態が、低階の心的状態を赤いリンゴを知覚するものとして思考する。そのとき意識的な低階状態はその質を、リンゴの性質として知覚する。

これに対して内観時には、意識的な高階状態が、低階の心的状態をやはり赤いリンゴを知覚するものとして思考する。しかしこのとき、この高階状態における意識的思考は、非内観時と同じ質を、心的状態の性質として思考する。もちろん内観時にも、一階の心的状態は二階の心的状態によって依然として思考されている。すなわち、依然として一階の心的状態は意識的であるので、当の質は、物理的質としても表象されているはずである。ただ、内観時における支配的思考は、当の質を物理的質として知覚する一階の意識的知覚ではなく、当の質を心的質として思考する二階の意識的思考⁽⁵⁾⁽⁶⁾である。

内観時に新奇な質が知覚されることがなくとも、心的質は内観時に意識的に思考されるのであって、それは、内観的意識において追加的に機能するものが、知覚様のものではなく思考様のものであり、それが当の質を心的質として意識的に思考するからだ。ただし、我々は物理的質をも意識的に知覚することができる。なぜなら我々は、非内観的意識において、当の質を、低階の知覚によって表象された物理的質として、意識的に知覚するからだ。

以上の考え方は、心的質と物理的質を区別することに依存している。それゆえ次に見る通り、ローゼンソールは高階思考理論とは独立な仕方、それらを区別しようとする。

一・五 物理的質と心的質

ローゼンソールによれば、我々は心的質と物理的質を区別しなければならない。心的質は物理的質に似ることすらない。ただ、様々な心的質が互いに類似する（あるいは異なる）仕方が、様々な物理的質が互いに類似する（あるいは異なる）仕方に平行するので、我々は物理的質を指示する語によって心的質への指示を固定することができるだけである。

感覚の色の質が互いに類似する（あるいは異なる）仕方は、物理的対象が有する知覚可能な物理的な色の質が互いに類似する（あるいは異なる）仕方に平行する。しかし、各々の感覚の色の質そのものは、各々の物理的な色の質とは類

似してはいない。いわば、心的質と物理的質は同型的、(homomorphic)である。この同型性は、他の感覚様相においても当てはまり、体性感覚においてすらそうである。実際我々は、自身の身体感覚を特徴づけるとき、その感覚を引き起こす刺激特性を特徴づける語を用いる。例えば、我々はしばしば、鋭い対象や鈍い対象によって引き起こされる体性感覚を、鋭い痛みや鈍い痛みと呼ぶ。

ただし彼によれば、知覚可能な物理的質の相互類似性は必ずしも、物理学が定義する物理的性質の類似性の指標によって定義される必要はない。ましてや心的質の相互類似性は、神経状態の相互類似性と対応する必要もない。むしろここで要求されている物理的質とは、我々がどれくらい容易にそれを識別できるか(もしくはそもそも識別できるか否か)によってその相互類似性が決定されるような物理的性質である。

注意すべきは、このような心的質が意識的であることが一切要求されていない点である。むしろ心的質とは、そのおかげで一連の知覚可能な物理的質を識別できるような、我々の心的状態の性質であって、それ自体は当の心的状態が意識的であることに依存しない。

このような心的質と物理的質の特徴づけは、高階思考理論に依存しない。高階思考理論はむしろ、これに基づいて意識的な知覚と無意識的な知覚を区別するのであり、質的な心的状態をすべて意識的と見なそうとする内在的な意識観の変種を拒否するのである。

二 高階思考理論への批判と応答

高階思考理論への批判は様々な仕方で行開されているが、この節では、その中でも代表的な三点の批判とそれらへの応答を見ることにする。ドレッキは事物の気づきと事実の気づきを区分し、変化旨を利用して批判を具体化し(二・一節)、さらに動物や幼児の意識でもって高階思考理論を追いつめようとする(二・二節)。バーン、ネアンダー、レヴァ

インらは、高階状態による誤表象の状況を考えることで、その理論の不足を明らかにしようとする(二・三節)。

二・一 事物に気づくことと事実気づくこと

ドレツキは、表象理論(一階表象理論)の立場から、一貫して高階思考理論を批判してきた。この立場からすれば、高階思考は余計な措定物以外の何者でもない。ドレツキ(Dretske, 1993)は、変化旨についての事実を利用して、この批判を実質化する。

彼はまず、気づき(awareness)と意識(consciousness)を同義的なものと見なしたうえで、「事物-気づき」(thing-awareness)と「事実-気づき」(fact-awareness)を区別する。我々は、ある事物Xに気づくからといって、XがFであるという事実にも気づくとは限らない。例えば、二七個の斑点をもつ鳥を見るときに、その二七個の斑点を持つ鳥に気づくからといって、その鳥が二七個の斑点を持っていることに気づくとは限らない。すなわち、事物についての気づき(事物-気づき)は事実についての気づき(事実-気づき)を含意しない。彼によれば、事実-気づきは事物-気づきと異なり、常に概念適用を伴った信念様の気づきである。

さて、例えば、一〇個の図形を含む図 α と、そのうち一個の図形が欠けた図 β を、我々が見るとしよう。我々は、これらの図の差異に気づかないままに、それぞれを見ることがある。ここで、 α にだけ現れる図形をSpotと呼ぶことにしよう。また、簡略化のために、 α の経験をE(α)、 β の経験をE(β)、Spotの経験をE(Spot)と呼ぼう。(ドレツキにおける「経験」という語は、「意識的な心的状態」と同義である。)

我々は、 α を見るときにSpotを見るはずである。すなわち、 α を見るときに我々は、Spotについての事物-気づきを有するはずである。すると我々は、 α と β の差異(すなわちSpot)についての事物-気づきを有するはずである。むしろ我々がここで欠いているのは、 α と β の差異たるSpotについての事実-気づきである。ましてや我々は、E

(α)とE(β)の差異たるE(Spot)についての事実ー気づき(すなわち高階の事実ー気づき)などは有していないであろう。ドレツキによれば、これが含意するのは、意識経験には、いかなる事実ー気づきも(ましてや高階の事実ー気づきも)必要ではないということだ。こうしてドレツキは、事実ー気づき(特に高階の事実ー気づき)を要求する高階思考理論が偽であると主張する。

ローゼンソール(Rosenthal, 2005b, 2005c)は、ドレツキの議論が高階思考理論を反証しないことを次のように説明する。我々は、 α を意識的に見るとき、 α を知覚する心的状態に対する高階思考を有し、 β を意識的に見るときも同様である。ここでは二つの時点それぞれにおいて、その知覚についての高階思考が形成されている。その高階思考は、当の図を自身が見ているという思考である。このとき我々は、当の状態における差異をなす側面を、差異をなす側面として思考する必要はないのだという。

私を見る限り、両者の議論はともに不十分である。まず、ドレツキの議論の不備は、ローゼンソールが指摘する通りである。すなわち、変化盲の事実からは、意識的状态に事実ー気づきが不要であるということとは導かれぬ。しかし、ローゼンソールの応答も不完全である。ローゼンソールは、変化盲の事実から事実ー気づきの不要性に至るドレツキの誤ったステップを指摘するが、事実ー気づきが不要であるという可能性そのものには応えていない。もしも、事実ー気づきが意識的状态に不要であるという点が、変化盲によって例証されなくとも、やはり事実なのであれば、上記のローゼンソールの応答とは関係なく高階思考理論が反証される。

二・二 動物と幼児の意識

ドレツキ(Dreiske, 1995)は、高階思考理論が要求する認知能力が、動物や幼児の意識にとって高すぎることを指摘する。高階思考理論によれば、知覚や思考といった表象状態が意識的であるためには、その状態が思考されていないけれ

ばならない。だがドレッキによれば、発達心理学的な事実として、多くの動物や三歳ごろまでの幼児は表象概念を有してはいないが、意識的な知覚や思考をもつはずである。それゆえ、高階思考理論は端的に偽となる。

ローゼンソール (Rosenthal, 1993, 1997, 2002b, 2005d, 2005e, 2008) は、言語能力を有さない動物の心的状態が意識的であることを否定しない。彼によれば、高階思考理論が要求する高階思考は、洗練された思考能力を要求しない。それは、自己を他者から区別することを可能にする程度の概念的能力であれば十分である。ましてや、高階思考は心の概念を備えたものである必要もない。高階思考に最低限要求されているのは、その対象を何らかの状態にあるものとして表象するということであって、それを心的状態として表象する必要はないという。我々人間の高階思考は、特に言語に影響される形で洗練されたものとなっており、これは人間の意識的状态が豊かとなることを可能にするが、これはある状態が意識的であることにとって必ずしも必要のないことであり、実際、言語能力を欠いた動物の意識的状态は、我々よりも豊かではないであろうと推測する。おそらく幼児の場合についても、ローゼンソールはこのような動物の意識と同様に扱うであろう。⁽⁷⁾

二・三 低階状態と高階状態の乖離

バーン (Byrne, 1997)、『ネアンダー (Neander, 1998)』、『レヴィン (Levine, 2001)』は、高階表象理論一般に対して適用可能な批判を示す。彼らは、意識の質的特性を最終的に決定するのが低階状態と高階状態のいずれであるのかについて、疑問を投げ掛ける。高階思考理論によれば、ある状態が意識的であるのは、それが適切な仕方でも思考されているときである。では、我々が赤いリンゴを眼前に置くと、赤いリンゴを知覚する低階状態が生起するが、同時に高階状態が自身の低階状態を緑のリンゴを知覚するものとして思考するならば、一体、緑と赤のいずれが見えるのか——すなわち、高階状態が低階状態を誤表象するとき、低階状態と誤表象的な高階状態のいずれが意識の質的特性を決定するのだ

ろうか。

レヴァイン (Levine, 2001) によれば、いずれの選択肢も高階思考理論に問題をもたらす。もしも、意識の質的特性の決定要因は低階状態だとすると、低階状態の質によって意識の質的特性が尽くされることになる。すると、高階状態が低階状態をいかに表象するかが、意識の質的特性を決定しないことになり、高階状態が意識の質的特性の説明において役に立たないことになる。意識的な質的特性を最終的に決定するのは高階状態（正確には高階状態が低階状態をいかに表象するか）であると考えると、結局、意識の質的特性の決定には一階状態が関わらないことになり、これは理論的説明の「分業」(Neander, 1997) を崩壊させる。高階思考理論は、意識を低階状態と高階状態の関係的特性によって説明する。すなわちそれは、低階状態の質的特性によって意識の質的特性を説明し、高階状態の随伴によって意識の状態と無意識の状態の差異を説明する（レヴァインはこれを「主観的特性」の説明と呼ぶ）。だが目下の状況では、いずれの選択肢を取ろうとも、質的特性の決定要因と主観的特性の決定要因が収束することになる。

ローゼンソール (Rosenthal, 2004) は、後者の選択肢を選び、意識の質的特性は高階状態が低階状態をどのように表象するかによって決定されるとする。どうやらローゼンソールは、レヴァインらが強調する点がそれほど問題であると認識していないようだ。とりあえずローゼンソールは、この問題を解決するとして提案される高階思考理論の変種が、自身の理論よりもよい身分にあるわけではないとだけ主張する（註2参照）。

ここまでは、ローゼンソールによる高階思考理論の構築過程と、それに対する代表的な批判を見てきた。次節で私は、ローゼンソールによる高階思考理論への心的質の概念の導入が、不成功に終わることを示す。

三 質的意識の説明を検討する

三・一 心的質は必要か？

ローゼンソールは、心的質は一階の知覚状態の性質であり、それは意識の質的特性として呈示されることがあると主張しているように見える。彼によれば、心的質は物理的質に似ることがなく、ただ一群の物理的質が互いに似るのと並行して、心的質が互いに類似し、その相互類似性は空間的構造を形成する。心的質は一階状態に内在する質であって、一階知覚状態の対象がもつ質（物理的質）ではない。⁽¹⁰⁾ この心的質は、意識的であることもあればそうでないこともあり、意識的であることに依存して決まるのではなく、その知覚状態の識別能力にのみ依存する。⁽¹¹⁾ 意識的知覚状態においては、一階知覚状態に高階思考が随伴し、一階状態の対象の物理的質ではなく、一階状態に内在する心的質が呈示される。⁽¹²⁾ 心的質の特徴と意識との関連は、結局次の点に集約される。

- (1) 心的質は、一階知覚状態に内在する性質であり、一階知覚状態の対象の物理的質には類似すらない。
- (2) 心的質は、一階知覚状態に高階思考が随伴するとき、意識の質的特性として呈示される。

また彼は、非内観的意識と内観的意識の間には、質的な差異はないとする。これは、高階思考理論にとっては必要な事実である。というのも、もしもそれらの間に差異があるとすると、高階知覚理論がもっともらしくなるからだ。もしも高階知覚理論が正しければ、それまで無意識的であった高階知覚が意識的になるので、内観的意識において新奇な質が発見されるはずである。だが我々は内観的意識においてそのような質を発見しない。それゆえ、高階知覚理論は偽であるとされる。対して、もし高階思考理論が正しければ、それまで無意識的であった高階思考が意識的になるので、内観的意識において新奇な質が発見されることはなく、事実そうである。⁽¹³⁾ このとき我々がするのはただ、注意のシフトによって、すでに呈示されている質を物理的なものではなく心的なものとして概念化するだけである。ローゼンソールは、

ハーマンに一致して、内観によって新奇な質は発見されないとするが、透明性テーゼに反して、心的質に非知覚的に気づくことができるとする（一・五節および註6参照）。

(3) 非内観的意識の状態において我々に呈示されるものと、内観的意識状態において我々に呈示されるもの間に、質の変化はなく、ただその質をどう概念化するかにいてのみ差異がある。

だが問題は、私が見るところ、それまで呈示されていた質がいったい何であるのかという点だ。ローゼンソールは、すでに呈示されていた質が非内観的意識の状態と内観的意識の状態においてどのように概念化されているのかという問いには答えているが、その呈示されている質は物理的質（知覚対象の性質）なのか心的質（知覚状態に内在する性質）なのかという問いには答えていない。

我々には、三つの選択肢があるように思われる。我々は意識的知覚状態において、(a)非内観時にも内観時にも心的質が呈示されているか、(b)非内観時には物理的質が呈示され、内観時には心的質が呈示されているか、(c)非内観時にも内観時にも物理的質が呈示されているか、これら三つのいずれかであろう。

(a)を採用することは、高階思考理論を投射主義的な理論へと変貌させる。我々が見るリングの色は、我々の知覚状態がもつ心的質であり、それが日常的にはリングの色だと思われるのは、心的質を物理的対象に帰属しているためである。このような高階思考理論自体には不整合はないし、また、投射主義的な理論が自然主義的な意識の説明を与えるかという点や、物理主義と整合的であるかどうかといった点についても、私は追及しないが、少なくともローゼンソールが投射主義を回避するためには（事実彼はそうしようとするのだが）、(b)か(c)を採用せざるをえない。

ローゼンソールは投射主義を回避しようとするとき、(b)を主張しているように見える。彼は、非内観的な意識の状態において我々は、一階知覚状態の心的質を介してそれに対応する物理的質を呈示されると主張する⁽¹⁴⁾。だがこれは(1)(2)とともに主張されるとき、(3)と不整合になる。もしも非内観時に物理的質を呈示され、内観時に心的質を呈示され、そし

てそれらが似ることのない質なのであれば、なぜ我々はそれらの質的差異を発見できないのだろうか。⁽¹⁵⁾

他方、(c)は明らかに(2)と不整合である。しかし高階思考理論の提唱者は、(2)を放棄して一向に構わないように思われる。それどころか、(2)を放棄すれば、高階思考理論は(c)を受容し、ローゼンソールが敵視する透明性テーゼと矛盾しない理論となる。彼は透明性テーゼを否定するが、必ずしもそうする必要はない。知覚経験についての表象理論の基本的主張は、知覚的意識において呈示されるものは知覚の表象内容、すなわち対象の物理的特性に尽くされているというものだ。

私の見るところでは、高階思考理論に心的質を導入することで上記のような問題が生じることが、物理的对象に内在する質と心に内在する質を、一方を他方に還元しないまま同時に救おうとすることの命運を例証している。ローゼンソールは、無意識的な心的質を導入することによって、意識の質的特性を状態意識から存在論的にも説明的にも分離させようとする。だが、たとえ心的質を意識的であることから独立させようとも、それが物理的質とは異なる質であると考える限り、結局は理論的な不整合を生じる。むしろ私が見るところ、次節で述べるように、高階思考理論は心的質を導入することなく、その本来の動機を満たすことができたはずだ。それは、高階思考理論に透明性テーゼを導入することに他ならない。

三・二 透明性と外在性

透明性テーゼは一般に、一階表象理論を強く動機づけるとされる。一階表象理論を提唱するドレツキ (Dretske, 1993) は、次のようにして状態意識を他動詞的意識で説明する。

ある心的状態が意識的であるのは、その状態がある対象を意識するときである。(A mental state is conscious if the state is conscious of an object.)

他動詞性原理とドレツキの代案の違いは、前者が状態意識に對する、他動詞的意識を措定するのに對して、後者が状態意識による、他動詞的意識を措定する点だ。

これに對してローゼンソールが他動詞性原理を拒否すべきでないと論じる際に訴えるものは、他動詞性原理を採用しなければ、意識の状態と無意識の状態の区別が失われてしまうという点だ。⁽¹⁶⁾ローゼンソールの言う通りに（そしてドレツキも受け入れる通り）、我々は状態意識と他動詞的意識を區別し、前者を後者によつて説明しようとするならば、他動詞的意識概念を最終的に表象の観点から具体化しなければならない。ここで他動詞性原理を受け入れるならば高階表象理論が帰結するが、ドレツキの代案を受け入れるならば次が帰結する。

ある心的状態が意識的であるのは、それがある対象を表象するときである。(A mental state is conscious if one is representing that state.)

これが、いわゆる表象理論ないし一階表象理論に他ならない。これに對して Rosenthal によれば、このような考え方は、あらゆる表象的な状態が意識的状态とみなされてしまうことになり、（加えて一般に心的なものを表象として理解する立場をとれば）あらゆる心的状態が意識的であることになる。こうしてローゼンソールは、表象理論を動機づける透明性テーゼをも拒否することになる。

しかし私の見るところでは、ローゼンソールの透明性の拒否は、高階思考理論にとつて必ずしも必要ではない。透明性に動機づけられる表象理論一般に不足しているのは、無意識的状态と意識的状态の差異について語る装置である。高階思考理論はそれらの差異について語る役割を演じうる。彼が心的質を導入した動機は、高階思考理論が質的意識にかんしてそれらの差異を語るために、心的表象が意識的であることから独立に質的であることを描こうとしたことである。彼はそうすることでまず無意識的な質的状态を導入し、さらにそれが意識的であることを高階思考の随伴によつて説明しようとする。だが正確に言えば、心的質を導入しなくとも、無意識的な質的状态について語ることは可能である。す

なわち、心的状態一般を表象的な観点から特徴づけ、心的表象が持つ質的特性は何であれ、心的状態に内在する質ではなく、端的に表象内容の質であるとして考え、そして高階思考の随伴によってその質的な表象内容が意識的となると考へるべきである。心的質を導入せずに透明性テーゼを採用すること自体は、高階思考理論の中心的主張——(HOT3)——と整合的である。たとえ心的質を導入せずとも、高階思考理論は心的状態が意識的であることと無意識的であることとの差異を説明する役割を果たしうる。このとき残された論点は、そのような意識的状态と無意識的状态の差異を高階思考理論がうまく捉えているかどうかだ。

高階思考理論の構築起点である他動詞性原理は、外在的な意識観には十分だが必要ではない。他動詞性原理を採用しないままに外在的な意識観を実質化し、意識的状态と無意識的状态を区別する理論を構築することも不可能ではない。ひとつの方法は、意識的状态に特有とされる表象的特性や機能的役割の観点から、意識的状态と無意識的状态の区別をするというものである。現在そのような理論は数多く開発されており、我々にはいくつもの選択肢がある⁽¹⁷⁾。

高階思考理論は、意識的状态と無意識的状态の差異を同定し、外在的な意識観を徹底することを通じて、意識の本性を説明することを目指す。ローゼンソールは質的意識を高階思考理論で説明するとき、知覚的な低階状態に内在する質として心的質を導入した。しかし、外在的な意識観を徹底させるために心的質を導入する必要はなく、我々はただ、物理的質を無意識的ではなく意識的に知覚する要因を探し求めるべきである⁽¹⁸⁾。

文 献

- Armstrong, D. M. (1980). *The Nature of Mind*. St. Lucia, Queensland: University of Queensland Press.
- Baars, B. J. (1988). *A Cognitive Theory of Consciousness*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Byrne, A. (1997). 'Some like it HOT: consciousness and higher-order thoughts,' *Philosophical Studies*, 86, 103-29.

- Carruthers, P. (2000). *Phenomenal Consciousness: A Naturalistic Theory*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dehaene, S. and Naccache, L. (2001). 'Towards a cognitive neuroscience of consciousness: Basic evidence and a workspace framework,' *Cognition*, 79, 1-37.
- Dretske, F. (1993). 'Conscious experience,' *Mind*, 102, 263-83.
- . (1995): *Naturalizing the Mind*. Cambridge, MA: MIT Press / Bradford Books. (1100ㄗ' 鈴木貴之監' 『2000年』)
- Gennaro, R. J. (1996). *Consciousness and Self-Consciousness: A Defense of the Higher-Order Thought Theory of Consciousness*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishers.
- Harnan, G. (1990). 'The intrinsic quality of experience,' in J. Tomberlin (Eds.), *Philosophical Perspectives*, 4: Action Theory and Philosophy of Mind Philosophical Perspectives (pp. 31-52). Ridgeview Publishing.
- Kriegel, U. (2003). 'Consciousness as intransitive self-consciousness: Two views and an argument,' *Canadian Journal of Philosophy*, 33, 103-32.
- Levine, J. (2001). *Purple Haze: The Puzzle of Consciousness*. Oxford: Oxford University Press.
- Lycan, W. G. (1996). *Consciousness and Experience*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Neander, K. (1998), 'The division of phenomenal labor: a problem for representational theories of consciousness,' *Philosophical Perspectives*, 12, 411-34.
- Prinz, J. (2005). 'A neurofunctional theory of consciousness,' in A. Brook and K. Akins (Eds.), *Cognition and the Brain: Philosophy and Neuroscience Movement* (pp. 381-96). Cambridge: Cambridge University Press.
- Rosenthal, D. (1986) 'Two concepts of consciousness,' *Philosophical Studies* 49 (3): 329-59. Reprinted in Rosenthal (2005a).
- . (1991). 'The independence of consciousness and sensory quality,' *Philosophical Issues*, 1, 15-36. Reprinted in Rosenthal (2005a).
- . (1993). 'Thinking that one thinks,' in M. Davies & G. W. Humphreys (Eds.), *Consciousness: Psychological and Philosophical Essays* (pp. 197-223), Oxford: Basil Blackwell. Reprinted in Rosenthal (2005a).

- . (1997). 'A theory of consciousness,' in N. Block, O. J. Flanagan & G. Güzeldere (Eds.), *The Nature of Consciousness: Philosophical Debates* (pp. 729-53). Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- . (2002a). 'Explaining consciousness,' in D. J. Chalmers (Eds.), *Philosophy of Mind: Classical and Contemporary Readings* (pp. 406-21), New York: Oxford University Press.
- . (2002b). 'How many kinds of consciousness?', *Consciousness and Cognition*, 11 (4), 653-65.
- . (2004). 'Varieties of higher-order theory,' in R. J. Gennaro (Eds.), *Higher-Order Theories of Consciousness* (pp. 19-44), Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishers.
- . (2005a). *Consciousness and Mind*. Oxford: Clarendon Press.
- . (2005b). 'Introspection and self-interpretation,' in Rosenthal (2005a). First published in *Philosophical Topics*, 28 (2) 201-33. (2001).
- . (2005c). 'Sensory quality and the relocation story,' in Rosenthal (2005a). First published in *Philosophical Topics*, 26, 321-50.
- . (2005d). 'Sensory qualities, consciousness, and perception,' in Rosenthal (2005a).
- . (2005e). 'Why are verbally expressed thoughts conscious?', in Rosenthal (2005a).
- . (2007). 'Phenomenological overflow and cognitive access,' *Behavioral and Brain Sciences*, 30 (5 / 6), 522-3.
- . (2008). 'Consciousness and its function,' *Neuropsychologia*, 46 (3), 829-40.
- Tye, M. (1995). *Ten Problems of Consciousness*. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Van Gulick, R. (2004). 'Higher-order global states (HOGS): An alternative higher-order model of consciousness,' in R. J. Gennaro (Eds.), *Higher-Order Theories of consciousness* (pp. 67-92). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishers.
- Weisberg, J. (1999). 'Active, thin, and HOT! An actualist response to Carruthers' dispositionalist HOT view,' *Psyche*, 5. ———. (2008). 'Same old, same old: the same-order representational theory of consciousness and the division of phenomenal labor,' *Synthese*, 160, 161-81.

注

- (1) ローゼンソールが高階思考理論の構築のために利用する他動詞性原理とは独立の出発点が、意識と報告可能性の接続である (Rosenthal, 1993, 1997, 2005e)。
- (2) ただし、高階状態と低階状態が同一の状態とする理論や、それらが部分的に統合されているとする理論がある。これらは同階思考理論や内在的高階思考理論と呼ばれる (Gennaro, 1996; Kriegel, 2003; Van Gulick, 2004)。これらの理論の動機は、高階の誤表象にまつわる問題 (二・三節参照) を回避しようとすることだが、それに対する批判として Rosenthal (2004) / Weisberg (2008) がある。
- (3) カラザース (Carruthers, 2000) は、高階思考が実際的な例化ではなく傾向的なものであるとする制約を与え、傾向的高階思考理論を提唱する。高階思考を傾向的なものとするに對する批判については、Weisberg (1999) / Rosenthal (2005b, 2005c) を参照せよ。
- (4) ローゼンソールはこれについての明確な根拠を与えないが、おそらく、高階状態が低階状態を否定したり疑ったりするときには、当の低階状態は意識的にはならず抑圧されるだけだろう。
- (5) 「しかし、もしこの質を物理的対象の知覚可能性質に基づいてモデル化しないのであれば (そしてそうすることで、知覚的気づき [によるモデル化] に制約することをやめるのであれば)、こういった質に気づきはしないということにはならなくなる。」 (Rosenthal, 2005b, p. 119)
- (6) 「注意をトマトからその視覚経験にシフトするとき、主観的には、何らかの新たな質が意識の流れにおいて生じるように思われない。これにより、ハーマンが主張するとおり、いずれの場合においても、気づいている質はトマトの質だけであるということが支持されるように思われるかもしれない。しかし、これは性急である。すでに述べたとおり、われわれは特定の事物をさまざまに仕方で意識することができる。赤いトマトを意識的かつ非反省的に見るとき、われわれは気づいている質をトマトの性質として概念化している。それゆえ、それこそが、その質を意識する仕方である。注意をトマトからトマトの経験へとシフトするとき、その質は異なる仕方で思考される。その気付かれている質は、経験の性質として再概念化され、我々はその質を経験の質的側面として意識するようになり、そのおかげで経験は赤いトマトを表象するのだ。気付かれている質を、物理的性質として意識するか、そ

れとも経験の心的性質として意識するかは、支配的な意識的思考がその質をどのように表象するかしだいである。」(Rosenthal, 2005b, pp. 120-1.)

(7) ただしローゼンソールは一部の論文で、幼児の痛みが意識的かどうかについて態度を留保する (Rosenthal, 2007)。カラザーヌ (Carruthers, 2000) は、表象概念をもたない動物や幼児は意識的狀態にないということを高階思考理論が含意すると認める。

(8) 「知覚的感覚の個々の質的性質は、個々の物理的対応物に似ることもなければ、いかなる点でも適合することもなく、

だが、性質のファミリーのレベルでは、重要な対応がある。視覚的感覚が示す、赤と緑の心的質は、その類似と差異が物理的対象の常識的色性質の間で成り立つ類似と差異に対応するような類似と差異をもつ性質のファミリーに属する。」(Rosenthal, 2005d, p. 198.)

(9) 「心的質は、そのおかげで生物が一連の知覚可能性質に反応するような状態の性質である。各様相の個々の心的質は、その様にアクセス可能な知覚可能性質の質空間に同型的な質空間における位置によって定義される。それゆえ、質的狀態が意識的であるとき、我々は、これらの類似と差異を反映する仕方では状態を識別する質を意識する。」(Rosenthal, 2005d, p. 202.)

(10) 「だが、物理的対象が持つ赤いという性質は、視覚的感覚が示す赤いという性質と端的に同じではない。第一に、そもそも感覚は対象ではない。それらは意識的な生物の状態であり、それゆえ対象についての状態である。それゆえ、感覚の赤さは、物理的対象のそれとは違って、対象の性質ではなく、対象についての状態の性質である。」(Rosenthal, 2005d, pp. 196-7.)

(11) 「ここではたらいっている質空間は、生物の識別能力によってのみ決まる。だが、人間やその他の生物が知覚可能性質を識別するときに頼る状態は、意識的である必要がない。それゆえこの識別能力への依存性は、当の質的狀態が意識的であることを含意しなす。」(Rosenthal, 2005d, p. 202.)

(12) 「そして、心的質を伴う状態に在るものとして自身を意識していることは、その質を伴う意識的状態の意識的質的特性を固定する。各意識的質的状態が、それが持つ意識的質的特性を持つのは、人がその状態を、知覚可能性質の空間に対応する特定性質の位置に同型的な心的質空間における位置を占めるものとして、意識するからである。」(Rosenthal, 2005d, p. 203.)

(13) 「人がトマトを意識的に見ることからその会話を内観することへとシフトするとき、その注意はトマトの質からその人の状態の質へとシフトする。だからといって人は、また異なる質を意識するようになるわけではない。だが、特定種の状態に在るものとしての自身についての意識的思考を有するようになることで、注意を意識経験の質にシフトする。そして、存在しているものとし

ての何かについての思考を有することは、人にその事物を意識させもするので、赤^{*}の心的質を伴う状態にいるものとしての自身についての思考を有することは、人に赤^{*}の心的質を意識させるのである。」(Rosenthal, 2005d, p. 223.)

(14) 「我々は、非内観的な意識経験において気付く質を、我々が経験する物理的対象に帰属する。そのため、我々が心的質を物理的対象に投射しているのかどうかはただ、我々が経験を内観することなく意識的に何かを見るときに気づく質が何であるかによるこのような場合に我々が気付く質は経験自体の性質であるとしたくなる。なぜなら質は、我々が経験するものとして、知覚においてのみ起こるものだからだ。……だが我々は、経験の心的質によって、独立に生起している物理的対象の色性質に知覚的に気づいているのであり、この心的質のおかげで知覚対象の色が我々に現前するのだ。物理的対象が持つものとして我々が知覚する質は、その経験の心的質によって、自身を経験に呈示する。」(Rosenthal, 2005b, pp. 121-2)

(15) なお、(b)を採用しつつも(3)を棄却するという手が高階思考理論には残っているようにも、一見思われる。実は、非内観的意識と内観的意識の間で質の変化は起こっており、しかしそれを質の変化として概念化することができないだけなのかもしれない。これは変化音において我々が、差異をなす側面を差異をなす側面として思考する必要はないのと同じであると言われるかもしれない。だが、質の変化として概念化しようがしまいが、内観による質の変化を認める時点で、高階思考理論が棄却され高階知覚理論が支持されることになるため、ローゼンソールはこの回避策を採用することはできない。

(16) 「いずれにせよ、ある状態が意識的であるのは、その状態にあるおかげで何かを意識したり、何か起きていることを意識したりするときである、という考えには、拒否すべき理由がある。思考と感覚は、すべてがこの条件を満たすのだ。我々は、思考が対象とするものについて、意識しており、そしてまた、感覚するものすべてをも意識している。それゆえ、ドレッキの説明では、あらゆる心的状態が意識的であることになる。これは志向的状态についてはありえそうにないと広く認められており、またすでに見たとおり、質的状态についてすらおそらく不正確であろう。」(Rosenthal, 2005c, p. 156) Rosenthal (2005b, pp. 113-4) Rosenthal (2008, p. 837) も参照せよ。

(17) 例えば PANIC 理論 (Tye, 1995) は、意識の現象的特性を、信念形成のために準備されている抽象的かつ非概念的な志向的内容に還元しようとする。この考えに沿えば、そのような内容をもつ心的状態が意識的であることになるだろう。また、グロークスバーンスミス説 (Bars, 1988; Dehaene & Nacchache, 2001) によれば、様々な表象利用システムに利用されるような表象が、意識の表象である。これに基づいて考えるならば、意識的状态とは、大域的に利用可能な表象状態として特徴づけられるはず

だ。他にも、AIR 理論 (Pina, 2005) によれば、意識的表象は、知覚処理経路の中間レベルに位置しつつ注意を向けられた表象として同定されるので、この考えに沿えば、その種の表象状態が意識的状态であることになる。

(18) デイヴィッド・ローゼンソール (City University of New York)、佐藤亮司 (東京大学)、山口尚 (京都大学) の各氏に有益な助言をいただいたことを感謝する。

(筆者 おおた・こうじ 京都大学大学院文学研究科博士課程・日本学術振興会特別研究員/哲学)

course of the networking those terms undergo an abrupt change, or a phase transition, so to say, in their meanings and definitions. This phase transition is so drastic that they deserve to be renamed after that from ‘theoretical terms’ to ‘activity terms’. This paper aims to figure out in what respects the two sorts of terms differ from each other, and how this transition occurs.

Higher-Order Thought and Qualitative Consciousness

by

Koji Ota

Graduate Student of Philosophy,
Graduate School of Letters, Kyoto University /
JSPS Research Fellow

David Rosenthal's Higher-Order Thought Theory, one of the most famous philosophical theories of consciousness, tries to identify our conscious states with ones which are represented by unconscious higher-order thoughts. It also appeals to mental qualities, which are supposed to be intrinsic to sensory and perceptual states in general, when trying to explain qualitative conscious states. In this paper I argue that the idea of the mental qualities, however, makes the theory inconsistent and that the theory would be able to take another path without appealing to the mental qualities: it can incorporate Transparency Thesis of experiences, which has been rejected by Rosenthal.